プロジェクト名：学校現場で児童生徒のうつ状態の早期発見・早期介入をサポートする拠点開発の試み

プロジェクト代表者：竹内一夫（教育学部・教授）

１ 目的・意義

プロジェクト代表者は平成 20-22 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（C）「学校現場で日常的・継続的に実施できる児童生徒のうつ状態チェックプログラムの開発」(課題番号 2059063) において、簡便で比較的精度の高いスクリーニングプログラムを完成させた。そこで次の段階として、判定後の介入効果を学校現場で実際に運用しながら探索することとした。そのための拠点事業をパイロット的に実施することを本プロジェクトの目的とした。「児童生徒のうつ状態サポートセンター（仮称）」という、学校現場から望まれていながらなかなか実現しなかった拠点事業をテスト運用するという発想が、本研究の特色である。本プロジェクトは必要最小限の資源の連携で、日常的・継続的なメンタルケアとそのサポートを学校現場で実現させることが最終目的であり、今後学校保健実践活動の拠点モデルの一つとなることが期待された。今回はプロジェクト予算の削減のため、実際に上記のスクリーニングプログラムを用いたマス・スクリーニング部分は実施せず、その事前準備と実施に伴うサポートセンターの設置およびテスト運用を優先させることにした。具体的には，うつ状態スクリーニングプログラムの学校現場での日常的実施を可能にするためのパソコンソフト・プログラムの開発（マイクロソフト社エクセル使用）とセンターの人的配置に伴うサポート事業の試験的開始（現場からのメンタルヘルスケア相談の受付と実施）を主軸とした。

２ 対象と方法

生徒用の日本学校保健会「児童生徒の健康状態サーベイランス」の「気分の調節不全傾向」8 項目と、教員用の厚生労働省「教師による児童生徒のうつ状態のチェックポイント」10 項目を組み合わせてうつ状態の簡便な判定を行うためのパソコン用ソフトを試作し、現職教員にモニターしてもらい、使い勝手などを検討してもらった。 また、リサーチアシスタントを配置し、「児童生徒のうつ状態サポートセンター（仮称）」のテスト運用を開始した。埼玉県および近県の約 10 名の現職養護教諭の協力を得て、サポートの必要と思われるケースの選別を行ってもらい、随時、実際の相談を受け付け、回答を行うこととした。回答は原則として精神保健指定医の資格を持つプロジェクト代表者が行い、場合によっては児童青年期精神医学会理事の専門医にも相談をする連絡体制を取った。

３ 結果

スクリーニングプログラムの現場での頻回実施のためのパソコンソフト試作品について，現職養護教員の意見を取り入れながら、レイアウト等について改訂を行った。以下に生徒用部分の出力を例示する。

通し番号	学年	組	番号	項目 1	項目 2	項目 3	項目 4	項目 5	項目 6	項目 7	項目 8	評価
1	1	1	13	1	1	1	1	4	1	1	1	陽性
4	1	1	16	1	1	1	2	1	1	1	1	陽性

このソフトを用いたスクリーニングプログラムのテスト運用を、協力内諾を得られた埼玉県内の公立中学校 1 校で、平成 24 年春から実施予定である。

また，サポートセンター事業も平成23年夏よりテスト運用を開始した。その結果、延べ30件のうつ状態を伴うメンタルヘルス不全の事例相談を受け付け、サポート対応した。結果の概要を表１に示す。

表１．「児童生徒のうつ状態サポートセンター（仮称）」テスト運用の結果概要（メンタルヘルス相談・サポート）

延べ相談件数	30							
ケース数	23							
校種別内訳	小学校	2	中学校	4	高校	16	教職員	1
性別内訳	男	7	女	14	不明	2		
推定疾患別内訳（重複あり）	自殺未遂	4						
	解離性障害	3						
	統合失調症	3						
	摂食障害	2						
	PTSD	2						
	ADHD	2						
	てんかん	2						
	ネグレクト	1						
	睡眠障害	1						
	登校拒否	1						
	パニック障害	1						
	性同一性障害	1						
	逸脱行動	1						
	アルコール依存	1						
	親の不当な要求	2						

いずれも重度であり、現場で対応に苦慮しているケースがほとんどであった。以下に上記の相談事業に関する相談者の感想と評価の一部を記す。

（現職養護教員Ａ：震災にて被災し、PTSDを発症した高校生女子の相談事例）疾患・症状の基礎が理解、確認できたことは有意義であった。現場で直面している実際の状況について、専門家から具体的なアドバイスが得られたのは大きく、養護教諭として自信をもってケースに対応することが出来た。

（現職養護教員Ｂ：家庭と学校で自殺未遂を繰り返している中学生女子の相談事例）リアルタイムで、実際に事例を検討して指導していただき、その上でアプローチできたのは、とても有難かった。校内でも養護教諭一人に負担がかかることがなくなってきた。これからも、こうした機会を利用して現場の指導に繋げていきたい。

４　まとめ

今回交付された予算の範囲で、プロジェクトの入口と出口の手配の目途が立ったのは大変に有意義であった。スクリーニングプログラム本体の実施は別途研究費で進行させることとなったが、特に実践的なサポート部分が、テスト運用とは言え、きちんと機能することが確認できたことは大きな一歩である。今後、サポートケアプログラム全体の運営に向けて、さらなる研究と実践の準備を積み重ねていきたい。